

日系人日本語変種の成立過程に関する
言語生態論的研究

課題番号：22520466

平成 22 (2010) 年度～平成 24 (2012) 年度
科学研究費補助金 基盤研究 (C)

研究成果報告書

平成 25 (2013) 年 3 月

研究代表者 渋谷 勝己

(大阪大学大学院文学研究科)

目次

プロジェクトの概要	i
展望論文	
1. 日系人日本語変種研究の潮流	渋谷勝己 1
—文法事象を中心に—	
研究論文	
1. 日系人と日本語変種	工藤真由美 31
—ウチナーヤマトウグチとの比較を中心に—	
2. 談話資料からみる日系カナダ人3世の会話スタイル	高木千恵 44
3. ブラジル日系社会における方言接触	白岩広行 51
—否定形式・存在助詞・アスペクト形式に注目して—	
資料	
1. 談話資料（ブラジル）	白岩広行編 71
2. 日系人日本語変種研究文献一覧	渋谷勝己編 92

ブラジル日系社会における方言接触

—否定形式・存在動詞・アスペクト形式に注目して—

白岩 広行

1. はじめに

本稿では、ブラジル日系社会における言語接触の様相を、日本語の方言差に視野をあて、実際の自然談話資料をもとに記述する。ブラジル日系社会では、2世以下の世代でポルトガル語へのモノリンガル化が進んでいるものの、現在高齢になった1世を中心として、日本語の様々な方言やポルトガル語が混交して使われている。この言語接触の様相については、これまでも様々な研究がなされているが、当地の状況を考えるうえで「日本語」をひとつの均質な言語と見なすのは適当でない。戦前・戦後を通じてブラジルに移住した人々の出身は多様だが、特に九州・中国地方を中心とした西日本各県の出身者が多数を占めている。移民が奨励された時期に標準語が普及していなかったことを考えても、当地の日系社会で使われている「日本語」が、いわゆる標準的な日本語でないことは明らかで、西日本方言的な特徴の見られることが数多く指摘されている(2節で詳述)。

これをふまえ、本稿では、特に東日本出身者がブラジル日系社会においてどのような方言接触を経験したかを記述する。端的な例として以下に示すのは、筆者の収録した福島県出身1世のIA氏の談話である([]で文脈の補足を、《 》でポルトガル語の日本語訳を入れた。カッコ書きで「白:」と示したのは、調査者白岩のあいづち)。

(1) 【初めてサンパウロに来たとき「サンパウロ」という名の駅がなくて戸惑った話】

IA: 俺は、俺は当然 São Paulo 《サンパウロ》っていう駅があると思ってたんだ。(白: ええ、ええ {笑}) それで、あの一、もう estação 《駅》から、ふたつぐらい手前【手前の駅】で、こんなして《こんなふうにして》、歩くんだよ。「切符、置いてくれって。(白: あ一、あ一、あ一、あ一)「Não 《いや》、俺はやらん」って。俺は、「Sa...、ん、São Paulo 《サンパウロ》まで、つぎ、どご estação 《駅》だ」って言うんだよ。Luz 《駅名: ルス》【長距離列車の終着駅】だどが、なんとが」って。(白: あ一、Luz 《ルス》)「Não 《いや》、俺は São Paulo 《サンパウロ》行く」{笑}(白: {笑}) とうとう、やらなかったんだよ。もう、手、上げて、帰ってったよ。(白: {笑}) {笑} そして、今度は、^{しとり}二人_りになったの。終点に来たら。(白: あ一)「降りろ」っちゅうわけだよ。(白: あ一、あ一、あ一)「俺は São Paulo 《サンパウロ》行くんだ」って(白: あ一、あ一、あ一)手まねで言うわけだ。「Não. São Paulo aq, aqui 《いや、サンパウロはここ》」って言うわけだ。(白: 「São Paulo aqui 《サンパ

ウロはここ》(笑)「ここだから降りろ」っちゅうわけだ。どうしても、しょうねえ《しょうがない》がら、出てみたら、前は、こう、【線路が】ないんだもん。

{笑} (白: {笑})

この例で示したとおり、IA氏はカ・タ行子音の有声化(オイテクレ>オイデクレ、イク>イグ、ココダガラ>コゴダガラ)、ヒ音の歯茎硬口蓋音化(ヒトリ>シトリ)など、音声面では福島方言の特徴を残しているものの、アスペクト形式のトル(思っと思った)、否定形式のン(やらん)など、文法面で西日本方言の影響を受けている。ただし、アスペクト形式や否定形式として西日本方言形だけを用いているわけではない。

(2)【福島にいたころ、農協の仕事をしたときの話】

IA: 僕らの来るときゃ【ときは】ね、(白: うん) えー、この一、いや、もう、だいぶ遊んだし、あっち歩きこっち歩き、今言ったように、えー、今度あの、学校終わって、仕事の、ちよ、ちゃんと入ってないから、(白: うん) あっちこちやったりね、(白: ええ、ええ) 体の調子悪くなったりして、休んで半年ぐらい、ぶらんぶらんしとったんかな、うちで。したら《そしたら》、*、農協に「是非」組合長からつかまれて、^{みっか}「3日でもいい」っていうんだよ。して《そして》、親父「そういうの、お前、^{みっか}3日でも行って*て、できなかつたら腰かけとるだけでいい」っつーんだよ。

(3)【じゃがいも畑の仕事がきついと知ってブラジル行きの決心が鈍ったときの話】

IA: で、ま、親から「行くな」、兄弟から「行くな、行くな」*やつ、やっど、んー、^{なっとぐ}納得してもらってブラジル^ゆ行くように決まって、今さら、そのCotia《コチア》移民の、ね、(白: ええ、ええ) えー、じゃがいも^{かづ}担ぎ^{かづ}できねえがらって、そのやめるわけい^しかんし、「どうするか」と考えて、^{しとばん}一晚。

(2)(3)の例に示すとおり、アスペクト形式としては東日本方言のテル(入ってない)と西日本方言のトル(ぶらんぶらんしとった、腰かけとる)が、否定形式としては東日本方言のナイ(入ってない、できねえ)とン(いかん)が併用されている。

本稿では、これらの事象をとりあげ、東日本方言と西日本方言の形式がどのような言語内的/言語外的要因によって使い分けられているかを記述する。東日本出身者が西日本方言形を受容していることはこれまでも指摘されているが、本稿では、自然談話の資料をもとに、より具体的な要因から使い分けの基準を明らかにする。

分析項目としては、動詞の否定形式、存在動詞およびアスペクト形式に焦点をあてる。これは、日本語の東西の方言差として代表的な言語項目であり、ブラジルの日本語に関する先行研究でも西日本方言的な特徴として否定形式のン、存在動詞のオル、アスペクト形

式のトル・ヨルなどの使用が特に指摘されているためである。

また、記述にあたっては東日本各県のなかでも、特に福島県の出身者およびその子供である2世を中心に考察をおこなう。ここで福島県出身者に主眼を置く理由は以下の2点にある。

- (a) 東日本各県のなかで福島県出身の移民は特に数が多い
- (b) 筆者自身が福島県の出身であり、調査にあたって福島県出身者のコミュニティに入りやすかった

以上で述べたように、本稿では、福島県出身者の自然談話資料をもとに、否定形式、存在動詞・アスペクト形式という言語項目について分析し、東日本出身者がブラジル日系社会でどのように西日本方言を受容したか、その方言接触状況の一端を言語的な側面に注目して記述する。以下、2節では移住者の出身県について簡単に示したのち、ブラジル日系社会での方言接触に関する先行研究を整理する。3節では自然談話資料の概要について示し、4節で具体的な分析をおこなう。5節で他の方言接触の事例（ポリビア沖縄系社会）と対照をし、6節でまとめとする。

2. 先行研究：移住者の出身県と方言接触について

ここでは、移住者の出身県について簡単にまとめたうえで、それに起因する日系社会内の方言接触について先行研究を整理する。

日本からブラジルへの移住は1908年に始まるが、その様相は戦前と戦後で大きく異なる。戦前の移住は第二次大戦直前の1941年まで続くが、それは永住を目的としたものではなく、ほとんどの移住者はブラジルで一稼ぎしたのちに日本へ帰国する意志を持っていた。戦後は1953年から移民の送出国が再開され、60年代初めまで毎年数千人規模で日本人のブラジル移住が続くことになるが、その多くはブラジルでの永住を意図したものであった。戦前からいた移住者も、戦後は永住を決意し、ブラジル社会への同化を目指してゆくようになる。これは敗戦により凋落した日本社会への失望感などによるもので、戦時中の日本語弾圧（ブラジルは連合国であった）などの影響もあり、戦後はポルトガル語への言語シフトが進んでゆく（永田1991a、工藤ほか2009など参照）。

このような状況から、一般的にブラジルへの移住者は「戦前移民」と「戦後移民」に分けられるが、戦前・戦後を通じて、東日本出身者より西日本出身者が多かったことが知られている。本稿であつかう否定形式、存在動詞、および存在動詞に由来するアスペクト形式については、図1に示すとおり、おおよそ新潟県・長野県・静岡県西部を境に東西で使用語形が分かれる。これをふまえて、新潟県・長野県・静岡県以東を「東日本」、富山県・岐阜県・愛知県以西を「西日本」、また、本土方言と大きく仕組みの異なることばが話される「沖縄」を分けて、出身県別に移住者数をまとめると表1、表2のようになる。

表1は石川（1989:15）に記載の表をもとに筆者が作成したもので、戦前移民（1940年時点でのブラジル在留者）の出身地を「東日本」「西日本」「沖縄」「樺太」に分けたうえで、移住者の多い上位10県については「内訳」としてその内数を示している。表2は、表1と同様の形で、国際協力事業団の『海外移住統計』（1994年）をもとに戦後の移住者数を旅券

発給県別に示したものである。

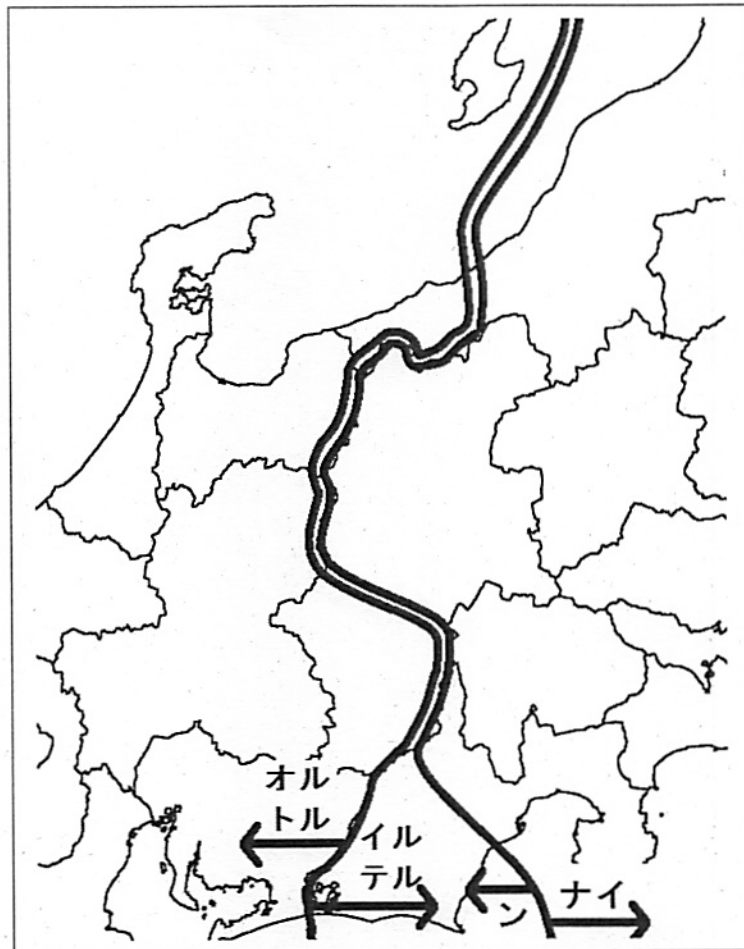


図1 否定形式・存在動詞の東西境界線¹

表1、表2を見ればわかるとおり、戦前・戦後を通じて、移住者の出身地は西日本であることが多く、西日本出身の移住者数が東日本出身者のおよそ倍を占める。特に福岡・熊本・鹿児島などの九州各県、広島・山口などの山陽地方各県は多くの移住者を送り出しており、「移民県」として知られている。一方、東日本で多くの移住者を送り出しているのは北海道および福島県だが、北海道の場合、全国から集まった開拓者の再移住という性格がある。また、戦後は東京都で旅券の発給を受けた移住者も多いが、東京が人口の集積地であることを考えると、これらの移住者も東京都出身とはかぎらない。それらの点を考慮すると、福島県が東日本では随一の「移民県」であったことが考えられる。つまり、ブラジル日系社会では西日本出身者が多数を占める一方で、東日本出身者としては福島県出身者が比較的まとまった数で存在していたということになる。

¹ 否定形式については『方言文法全国地図第2集』の図80「書かない」、存在動詞については『日本語地図第2巻』の図53「いる」、アスペクト形式については『方言文法全国地図第4集』の図199「散っている(結果態)」をもとに、筆者が作図した。アスペクト形式について、進行態でヨルを用いる地域が西日本に広く存在するが、本稿であつかう資料にヨルはほとんど見られなかったので、ヨルの分布は省く。また、境界線を挟んで両語形の併用地点などもあるので、あくまで分布を簡略化したものとして理解されたい。

表1 1940年時点での出身県別ブラジル在留者数

		移住者数
東日本		56926 (29.5%)
(内訳)	北海道	11791
	福島県	10738
	その他	34397
西日本		119187 (61.7%)
(内訳)	熊本県	21482
	福岡県	17698
	広島県	12983
	鹿児島県	6112
	岡山県	5777
	山口県	5709
	高知県	4527
	その他	44899
沖縄		16287 (8.4%)
樺太		62 (0.0%)
不詳		694 (0.4%)
総計		193156

石川友紀 (1989:15) の表をもとに作成

表2 戦後の旅券発給県別移住者数

		移住者数
東日本		18383 (34.3%)
(内訳)	東京都	3590
	北海道	3228
	福島県	2341
	その他	9224
西日本		29096 (54.2%)
(内訳)	熊本県	3771
	福岡県	3550
	長崎県	2898
	山口県	1934
	鹿児島県	1616
	和歌山県	1615
	その他	13712
沖縄		6178 (11.5%)
総計		53657

『海外移住統計』(国際協力事業団、1994年)をもとに作成

このような出身地の違いを反映して、ブラジル日系社会で使われる日本語が西日本方言的な性格を帯びていることは、数々の論者によって指摘されている。

まず、動詞の否定形式としてンが多用されていることについては野元 (1969a; 1969b)、長尾 (1977) などの指摘がある。

(4) 七月号にも書いたように、打ち消しの助動詞には「ん」が好まれているようだ。これは子どもの作文にも現われる。

「ぼくは雨ふりがすかんです。／なしてかといったら、／ブランコにのれんし、／すべりだいもすべれんし、／……」

という次第だ。

(野元 1969b:71)

また、存在動詞としてオルが多用されることも、野元 (1969b)、鈴木 (1982) などで指摘されている。

(5) 規範のゆるみは、また方言の混入を許すことにもなる。移住した人々が、熊本や広島など、中国・九州・沖縄あたりの出身者が多数を占めていたので、混入している方言も圧倒的に西部方言が多い。

書きことばには、さすがに余りみられないが、日常的な語を多く使う日本語学校の生徒の作文には、時々顔を出す。一番多いのは「おる」である。

○三日おってうちへかえったときは、たいへんつかれました (S5・13)

○ブラジル国にこうけんされた事がみとめられておる結果と思うのであります。(S4・19)

以上は目についた例を挙げたエピソード的な指摘だが、永田 (1991b) はパラナ州アサイ移住地でおこなった多人数調査から、西日本方言形の使用が多いことを示している。本稿に関わる各項目について永田 (1991b) の調査結果を示すと以下の表ようになる。アサイ移住地は全国各地からの移住者が混住する移住地だが²、西日本方言形の否定形式ン、存在動詞オル、アスペクト形式トル・ヨルが、東日本方言形 (=標準語形) と併用されつつ、かなりの割合で使われていることがわかる。

表3 アサイ移住地における動詞否定形式の各使用者数 (永田 1991b:169 より)³

	ン	ン/ナイ	ナイ	計
一世	15 (50.0)	2 (6.7)	13 (43.3)	30
準二世	9 (47.4)	2 (10.5)	8 (42.1)	19
二世	18 (52.9)	1 (2.9)	15 (44.1)	34
三世	2 (40.0)	0 (0.0)	3 (60.0)	5
	44 (50.0)	5 (5.7)	39 (44.3)	88

² 永田 (1991b) によれば、北海道・福島県の出身者が約 10% を占める。

³ カッコ内の数字はその世代での該当する回答者の割合。「ン/ナイ」は両語形の併用を表す。日本で生まれたものの、幼年期にブラジルに渡航し、ブラジルで生育した世代を「準二世」としている。以下の表4、表5も同じ。

表4 アサイ移住地における存在動詞の各使用者数 (永田 1991b:177 より)

	オル	オル/イル	イル	計
一世	19 (65.5)	2 (6.9)	8 (27.6)	29
準二世	15 (78.9)	1 (5.3)	3 (15.8)	19
二世	19 (55.9)	4 (11.8)	11 (32.4)	34
三世	3 (60.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	5
	56 (64.4)	8 (9.2)	23 (26.4)	87

表5 アサイ移住地におけるアスペクト形式(進行形)の各使用者数 (永田 1991b:170 より)

	ヨル	トル	テル	ヨル/トル	ヨル/テル	ヨル/チョル	計
一世	1 (3.2)	2 (6.5)	15 (48.4)	6 (19.4)	5 (16.1)	2 (6.5)	31
準二世	5 (27.8)	1 (5.6)	6 (33.3)	3 (16.7)	3 (16.7)	0 (0.0)	18
二世	3 (8.8)	3 (8.8)	12 (35.3)	4 (11.8)	12 (35.3)	0 (0.0)	34
三世	2 (40.0)	0 (0.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	5
	11 (12.5)	6 (6.8)	35 (39.8)	13 (14.8)	21 (23.9)	2 (2.3)	88

これらの西日本方言形が東日本出身者にも使われていることを、永田 (1991b) は「東日本出身の一世でもオルを使い、日系社会の共通語になりつつある。(p.176)」と指摘している。また、中東 (2006) が宮城県出身者、井脇 (2005) が北海道・福島県・茨城県・東京都・長野県などの出身者について、西日本方言形の使用が認められることを取り上げている。

以上、ブラジルの日系社会では、西日本方言形として動詞の否定形式ン、存在動詞オル、アスペクト形式トル・ヨルが広く使われており、東日本出身者も西日本方言的な特徴を受け入れていることが先行研究の記述から読み取れる。しかし、東日本方言形 (=標準語形) のナイ、イル、テルなども併用されており、どのような言語内的・言語外的条件によって東西の方言形式が使い分けられているかは十分に明らかでない。そこで、以下、本稿では、自然談話資料を対象とすることによって、東日本出身者がどのような形で西日本方言形を使用しているか、より具体的な要因について分析する。

3. 談話資料の概要

談話収録調査はブラジル福島県人会の協力により 2012 年 3 月におこなった。収録談話の一覧を以下の表に示す。いずれの談話も収録・文字化した時間数は約 30 分である⁴。

⁴ 談話【01】は約 60 分録音したが、文字化が済んでいるのは約 30 分であり、本稿では文字化済みの約 30 分のデータを分析対象とする。

表 6 収録談話一覧 (1世)

談話 番号	話者	生年	性別	出身地	渡航後の 主な居住地	渡航 年齢	主な職業
	IA	1933	男	福島県 郡山市	Mogi das Cruzes	24歳	農業
[01]	IB*	1935	男	山形県 長井市・山形市	São Paulo	18歳	商工業
	白岩	1982	男	福島県 福島市			(調査者)
[02]	IC	1935	男	福島県 白河市	ブラジル中 を転住	24歳	農業
	ID	1947	男	福島県 大玉村	São Bernardo do Campo	27歳	技師

*IB は発話量が極端に少なく出身も異なるため分析対象としない

表 7 収録談話一覧 (2世)

談話 番号	話者	生年	性別	出身地	父の出身	母の出身	主な職業
[03]	NA	1934	男	São Paulo	福島県 会津美里町	石川県	会社員
	NB	1956	男	Itapecerica da Serra	福島県 南相馬市	東京都	会社経営
[04]	NC	1944	男	Mogi das Cruzes	福島県 いわき市	福島県 いわき市	会社員* (日系企業)
	ND	1945	男	Mogi das Cruzes	福島県 いわき市	福島県 いわき市	会社員* (日系企業)

*NC、ND は日本に本社を置く企業のブラジル支社ないし子会社で勤務

このうち、談話【01】は調査者の白岩がIAにインタビューをし、同席者のIBが合間に発話する形で進めた談話である。IBの発話量は極端に少なく、出身地も異なるため、本稿の分析対象からは外すことにする。そのほかの談話【02】【03】【04】は、話者同士が1対1で自然に会話したものである。

話者はみなブラジル福島県人会の会員・関係者であり、県人会の集まりで顔を合わせる知人同士である。談話【01】【03】【04】には丁寧体の発話もある程度見られるが、おおむねカジュアルなスタイルの談話となっている。文字化した資料の一部を本稿末尾に掲げたので、そちらも参照されたい。

4. 分析

本節では、具体的な言語項目として動詞の否定形式 (4.1 節)、存在動詞 (4.2 節)、アスペクト形式 (4.3 節) のそれぞれを取り上げ、ナイ/ン、イル/オル、テル/トルの使い分けに関わる要因を分析する。そのうえで 4.4 節でまとめをおこない、言語内的・言語外的条件から使い分けのあり方を整理する。

4.1 動詞の否定形式

まずは、話者ごとの区別をせず、言語内的な要因から否定形式の使用状況について整理する。表 8 は、動詞の活用ごとに使用される否定形式をまとめたものである⁵。

表 8 動詞の活用と否定形式の使用

	ナイ	ン
五段動詞	39	35
一段動詞	63*	4*
サ変動詞	12	6
カ変動詞	6*	0*
	121	45

符号検定の結果、両形式の使用数に $p < 0.05$ 水準で有意な差が見られた項目に*を付す

この表に示すとおり、西日本方言形ンの使用は、ほとんど五段動詞とサ変動詞の場合にかぎられており、一段動詞では基本的にナイのみが使用されている。以下、実際の使用例を掲げておく。

(6) 【老後の計画について話している】

ND: もう、あの、あの、つまらない人生を送ってもしようがないからね。もうあと、何年あるかわかんないからね。

NC: お迎いは、神様にお任せしとかないといかんからね。{笑}

ND: そうそうそう。まあ、5年、10年、20年かわからんけど、(NC: はいはい)でも、やっぱり元気なうちにね、(NC: そう**) あの一、できるだけ、す、好きなこと、あの、や、やってみたいと思ってますけど*。

⁵ 受身・可能形式の(ラ)レル、アスペクト形式のテルなど、一段型の活用をする助動詞類に後接したものは、一段動詞に後接した例に含めて集計している (4.3 節で示すとおり、同じアスペクト形式でもトル・ヨルに否定形式の後接した例はなかった)。

(例) NC: 家のほうはあんまり空けられないっていうこともあって

(例) IC: まあ、俺、お金、自分で払ってないから。

また、丁寧体のマスに後接したンの用例 7 例は集計から省いている (そもそもナイが生起する環境ではなく、使い分けの有無を議論しえないため)。

(例) NA: だけど、ことばで、だから Português 《ポルトガル語》とか日本語で、苦勞したつーことは、ねー、全然ねー、覚えがありませんね。

ナイ/ンがそれぞれ活用したナカッタ、ナクテ/ンカッタなどの例は、それぞれナイ/ンにふくめて集計している。ナイの連母音が融合したネーという語形もナイにふくめて集計している。

【五段動詞：ナイ・ンの例】

(7) 【一緒にブラジルに来てくれる嫁を探したときの話】

IA：親戚とか知り合いのとき、昼も夜も歩いて《回って》、「いいのはいねえが」と、「ブラジルへ行くんだ」って、何回も歩くけど、「ブラジルまではね」って言われてさ {笑} (白：{笑}) いねえんだって。

【一段動詞：ナイの例】

(8) 【子供のころのポルトガル語使用について】

NC：我々日系2世、特にあの、いなか育ちは、要するに家庭での会話つちゅーの、すべて日本語だったんだよ。(ND：そうだね) だから、ポルトガル語のほう、あんまりこう、うまぐね、できなかったね。対応うまぐできない場合が多かったんだよね。【中略】頭んなかで思ってるような、(ND：うん) あー、表現つちゅーのあんまりできなかった。(ND：ええ) 日本語ではできたんだよね、あの一、変な話***。だけど、ポルトガル語では出てこないと (ND：そうだよ、んー) ということで、苦労したほうだけれどもね。

【一段動詞・カ変動詞：ナイの例】

(9) 【今の日本の若者は甘やかされているという話】

NB：まあ、みんな、アメリカ人と似た、似たよ…ものになってきてるんだよね。

(NA：はいはい) それで、まあ、それくらべると、まあまあ、そういうのは、まあ、その人が、まあ、動かない、運動せん。「なんでせん」っていう、

【中略】

NA：甘やかされてね、だからもう、そういうふうなってきたらね、あんまり、仕事も、し、ねー、

NB：しないね。{笑}

【サ変動詞：ナイ・ンの例】

五段動詞でナイとンが併用される一方、一段動詞でンが使われないことについては、他の表現との語形の衝突が要因として考えられる。福島方言では⁶、一段動詞およびラ行五段動詞のように、終止形がルで終わる動詞に準体表現のノ、終助詞のナなどが後接した場合、動詞末尾のル音が撥音(ン)になることが多い。具体的な動詞(一段動詞「できる」、ラ行五段動詞「掘る」)を例に挙げると、「デキンノ<デキルノ」「デキンナ<デキルナ」、「ホンノ<ホルノ」「ホンナ<ホルナ」などのような形でル音の撥音化が生じる。そのため、一段動詞で否定形式にンを使用した場合、動詞の否定形とこれらの語形が同形となる。実際の使用例を下に掲げるが、この例では、一段動詞「できる」の否定形式としてナイを用いているので、否定の表現であることが明らかである。しかし、もし仮に「できる」の否定形式としてンを使用した場合、「デキンノ」という語形が「デキル+ン (否定)+ノ (準体)」なのか、「デキル+ノ (準体)」なのか、文脈の支えがないかぎり、区別がつかなくなる。

(10) IC：百姓でも、作ったもの、自分でこれ、こうじゃあ、できないの。

⁶ おそらく福島方言以外にも、東日本の多くの方言で同様の事象があるものと思われる。

(*できんの)

一方、五段動詞の場合、ラ行活用以外では撥音化は生じないし、ラ行活用であっても否定の形は「ホランノ」、「ホル+ノ」の形は「ホンノ」であって、語形の衝突は生じない。このように、動詞末尾のル音が撥音化した語形との衝突を避けるため、一段動詞ではンがほとんど用いられないのではないかと考えられる。

以上は言語内的な条件づけによるンとナイの使い分けであったが、次に、言語外的な条件として話者ごとの違いについて考える。ナイとンが併用される五段動詞・サ変動詞について、話者ごとの否定形式の使用状況を表9にまとめる。話者ごとに分けた場合、用例数が少なく、特にサ変動詞についてははっきりした傾向が見えないが、五段動詞については一部の話者で使用傾向を確認することができる。

表9 五段動詞・サ変動詞における話者ごとの否定形式の使用

		五段動詞		サ変動詞	
		ナイ	ン	ナイ	ン
1 世	IA	1*	23*	2	2
	IC	2	2	3	0
	ID	3	0	2	0
2 世	NA	3	4	1	0
	NB	16*	1*	3	4
	NC	7	2	1	0
	ND	7	3	0	0
		39	35	12	6

符号検定の結果、両形式の使用数に $p < 0.05$ 水準で有意な差が見られた項目に*を付す

IA は五段動詞の否定形式としてほぼンのみを用いており、全24例中1例しかナイを用いていない。一方、2世のNBはほぼナイのみを用いており、ンは全17例中1例しか見られない。他の話者については、統計的に有意なほどの差は確認できないが、NBと同様に2世の話者でナイを多く使用する傾向が見られる。この傾向が2世に一般的なものとはかぎらず、社会的な要因については様々に考慮する必要はあるが、2世の話者は言語形成期に日本語学校に通っていたことが、各話者の談話内容から確認できる。

(11) NC: まあ、日本学校はね、子どもころから、ずっと、まあ、7年間、**9年ぐらいかな、通わしていただいて、でー、たまたま、まあ、そんな環境のなかだったんで、「読むこと」「聞くこと」うちゅうのは全部やっぱり、漫画とか本はみんな日本語だった**ね。

ND: そうだよねー。(ND: ええ) んー。だ、そのへんがねー、あの、私らの時代つーのは、日本語覚えるのは、非常に、あの一、

NC: 恵まれてた。

(12) NB: まあ、僕たちはね、子どもたちはね、**、まあ、日本学校はねー、まあ、東京の使うことばっていうのを教えよったからね。

NA: あ、標準語ですよ。あー。

また、表7で示したとおり、NC・NDは日本に本社を置く企業のブラジル支社・子会社で長らく勤務しており、仕事上、日本から来た駐在員や日本在住の日本人に接する機会が多かったと考えられる。ほかにも様々な要因はあるだろうが、このような日本語学校や日系企業での経験から標準的な日本語変種にふれる機会が多く、標準語形としてのナイを使う頻度が高くなったのではないかと考えることができる。

4.2 存在動詞

次に、存在動詞の使用状況について整理する。先に全体の用例数について確認するが、存在動詞の全57例のうち、イルは22例、オルは35例と、オルの使用頻度のほうが高い⁷。このうち、イルは述語の丁寧さや肯否によって条件づけられたときのみ使用される傾向にある。表10に示すとおり、存在動詞がマスの後接して丁寧体になった例は7例見られたが、いずれもイルの例であり、オルがマスの後接した例は見られなかった⁸。

表10 述語の丁寧さ・肯否によるイル／オルの使い分け

丁寧さ	肯否	イル	オル
丁寧体(～マス)		7*	0*
非丁寧体	肯定	8*	32*
	否定	7	3
		22	35

符号検定の結果、両形式の使用数に $p < 0.05$ 水準で有意な差が見られた項目に*を付す

(13) NB: ま、ブラジルだけじゃないよね。全国なんだよね、それは。(NA: うん)

まあ、ほんとに、今の、まあ、僕は子供もいますけどもね、

丁寧体の表現は標準語的なものと見なされ、標準語形としてのナイが用いられているものと考えられる。

また、非丁寧体の場合でも、述語が否定の形をとる場合にはイルが用いられやすい。下例のように、イナイという形の例が7例見られた⁹。一方、オルが否定の形をとった例は3例しかなく、ンを後接した例が2例、可能表現としてオレナイという形をとった例が1例

⁷ このほかイラッシュアルが1例のみ見られたが、分析対象からは除くことにする。

⁸ 下例のようにデス(デショ)を後接した例が1例見られたが、マスを後接した例のみを「丁寧体」としてあつかった。

(例) IA: あれよ、あの、ん、カツギアリつって、あの、葉っぱを切って、(白: ええ、ええ) 持って、かえ、持って、巢に持ってぐやつおるでしよ。

⁹ 否定形式としてンを後接した「イン」という例は見られなかった。これは4.1節で見たように、一段動詞にはんが後接しにくいとめと考えられる。調査時以外の筆者のブラジル滞在期間を通して、当地の日本語として、「イン」という表現は耳にした記憶がない。

見られた¹⁰。

(14) IC:【不当な条件で】仕事する、んな、Cotia《コチア》の馬鹿がいないよ、誰も。

(15)【最近の日本の学生は留学をしないという話題】

NA: あんまり外国で勉強しようつつうのはね、(NB: うーん) 今はもう、{咳

あの、たった、全体のが、男の学…、2割しかいないっちゃうんですよね。

【中略】今の日本は、ほんと減っちゃってね、ほとんど、ねー、おらんつつってましたよね。

(16)【震災で避難した親戚の話題】

NB: 仕事し、まあ、やってますけども、まあ、だけども、自分のふるさとで、

{笑} ねー、(NA: んー) んー、…のに、おれないっていうことは、つらいみたいらしいね。

以上のように、イルの使用はオルに比べて少なく、特に (a) マスを後接して丁寧体になる、(b) イナイの形で否定になる、の2つの場合に使用がかぎられる傾向が見られる。

次に、ある程度まとまった数の用例がある「非丁寧体」かつ「肯定」の場合について、話者ごとの使用傾向を見る。

表 11 非丁寧体・肯定の場合の話者ごとの存在動詞の使用

		イル	オル
1 世	IA	0*	14*
	IC	1	5
	ID	0	0
2 世	NA	0	2
	NB	1*	8*
	NC	2	3
	ND	4	0
		8	32

符号検定の結果、両形式の使用数に $p < 0.05$ 水準で有意な差が見られた項目に*を付す

(17) IA: 出て、体の調子悪くて、(白: あー) 田舎へ帰って、3年ぐらいおったかな。
2年ぐらいおったかな。

(18) ND: うん。〇〇【NCの名前】さんは福島にまだ親戚はいるんですか?

NC: いや、親戚ね、親戚はね、あの一、連絡は***ないんですけども、ん一、いわき市のほうには、あの一、いわゆる私のね、えー、父の、お、まあ甥 (ND: 甥。うん) になる、それ、その程度のレベルの、(ND: うん、

¹⁰ オレナイの例をのぞけば、否定形式としてナイを後接した「オラナイ」という例は談話資料中には見られなかった。ただし、筆者のブラジル滞在中、「オラナイ」という表現を使用する話者は、福島県出身者を含めて何人かいたことを記憶している。

うん) まあ、家族関係っていうのね、まあ、おるんですけど、ほとんどもう、連絡がないんですけどね、(ND: あー、なるほどね) ただまあ、地域的に離れてるんで、(ND: ええ) これと言った問題はなかったというふうに思いますけどね、(ND: *) これはあの一、逆に、ブラジルにおる親戚からの話の、あの、…からでは、ではね、

そもそもイルの使用数が少ないため、はっきりした傾向はつかめないが、1世話者がほとんどオルを用いているのに対し、2世話者はある程度の割合でイルを使用している。4.1節で述べたとおり、2世は日本語学校や日系企業での勤務経験から標準的な日本語変種に接する経験が多く、標準語形としてイルを用いているのではないかと考えられる。

4.3 アスペクト形式

ここでは、存在動詞の分析結果をふまえて、アスペクト形式の使用状況についてまとめる。アスペクト形式としては、テルが167例、トルが32例、ヨルが3例見られた¹¹。後述するが、ヨルはNBが3例使っているだけなので、ひとまずテルとトルの使用状況にかぎって整理をおこなう。

表 12 述語の丁寧さ・肯否によるテル／トルの使い分け

丁寧さ	肯否	テル	トル
丁寧体 (～マス)		50*	1*
非丁寧体	肯定	108*	31*
	否定	9*	0*
		167	32

符号検定の結果、両形式の使用数に $p < 0.05$ 水準で有意な差が見られた項目に*を付す

全体的にテルの用例数が多く、トルの用例数は少ないが、表 12 としてまとめたとおり、特に丁寧体の場合、および否定の形をとる場合には、ほぼテルのみが用いられる。これは存在動詞としてイルが用いられるのと同様の条件である。以下、用例を示しておく。

(19) NB: あ、あの人の一、お母さんたちにみんなお世話になってますよね。

(20) IA: あそごに、〇〇【学校名】ってあったんだよね。(白: あー) そごの電気科をやったんだけど、(白: あ) 電気**なんか、なんにも覚えてないね、いま。{笑}

丁寧体でトルが用いられる例は1例のみ見られたが、それは下に示すとおり～テオラレマスという形で用いられたもので、トルに直接マスが後接したトリマスという形での使用例は1例も見られなかった。

(21) NC: あ、〇〇【人名 F】さん。野球の、なんかね、コーチやっておられました

¹¹ テイル (4例)、テオル (4例) は、それぞれテル、トルにふくめて集計する。このほか、尊敬語のテラッシュルが1例見られたが、分析対象からは除く。

ね。

また、テルが否定の形をとる場合、否定形式として使われているのはナイであり、ンを用いた例は見られなかった。これも存在動詞イルの使用と同様の傾向である。

以上のように、アスペクト形式としては基本的にテルが用いられており、トルが用いられるのは、「非丁寧体」かつ「肯定」の場合にかぎられる。次に、この「非丁寧体」かつ「肯定」という条件の場合、各話者がテル、トルのどちらを使用しているかを表13にまとめる。

表13 非丁寧体・肯定の場合の話者ごとのアスペクト形式の使用

		テル	トル
1 世	IA	3*	20*
	IC	28*	1*
	ID	6*	0*
		NA	18*
2 世	NB	16	8
	NC	17*	2*
	ND	20*	0*
		108	31

符号検定の結果、両形式の使用数に $p < 0.05$ 水準で有意な差が見られた項目に*を付す

アスペクト形式の使用数は全体的に多いので、話者ごとに分けても一定の用例数が得られるが、表13に示すとおり、トルを用いるのはIAのみである。それ以外の話者については、ある程度トルを使用するNBを除いて、ほとんどテルのみを用いている。

(22) IA: うちの****、郡山から二本松のあいだ歩いとった《移動してた》だけで、郡山で働いとったんだげどな、

(23) ID: あー、あのころ【移民を】募集してたもんね。いっぱいね。

IC: 募集してた。

ID: ^{ぜんごくでぎ}全国的にね。

IC: いや、「Cotia 《コチア》青年」も募集してってるしね。

(24) NA: *、そうよね、やっぱり。こっちの、【食生活が】西洋式んなってるのよね。

NB: うん。そうよね。

NA: 油っこいもんとかね、からい【「塩辛い」の意味か】のね。

NB: うん、あと、Nāo 《いや》、その、油っこい、からいものはね、まあ、あの一、ちょっと、あー、支那ではよく食べてるのよ。それ、昔から食べてる*ね。(NA: うーん) それで、肥えないんだからね。

4.2節で見た存在動詞の場合には全体的に西日本方言形オルの使用が多かったが、アスペクト形式の場合には東日本方言形テルの使用が多いということになる。

同じ1世の話者でもIAとIC・IDでは使用形式に差があるが、ICは15年間の日本での出稼ぎ経験があり、その間に標準的な日本語変種に接した可能性がある¹²。

(25) IC: わー、日本におったら、^{いぎ}息詰まっちゃうな。俺も日本で15年も、(ID: う

ん) あの、アルバイトして働いたけど、

また、以下は筆者の聞き取りによるが、IDはブラジル渡航後、技師(設計関係)として仕事をしているが、ブラジル人とのつきあいが多く、日系人とのつきあいは相対的に少ない。それに対し、IAは長期間の出稼ぎ経験がなく、ブラジルでは長らく農業を営んできた。つまり、IAはコロニアと呼ばれる農村型のブラジル日系社会のなかで西日本出身者と交わる機会が相対的に多く、そのために西日本方言のトルを多用するものと思われる。

また、同じ2世でもNBはトルの使用が比較的多く、この節の冒頭で述べたように、7人の話者のなかで唯一、3例だけではあるが、ヨルを使用している。

(26) NB: まあ、日本学校はねー、まあ、東京の使うことばっていうのを教えよつたからね。

(27) NB: まあ、父たちが、いや、「勉強**、**、読めな一。^{はなし}話^ゆせえ」なんて言
って、やりよつたからね。

ヨルの用例は3例とも上例のとおり過去形のヨッタという形で、過去の体験を回想する際に使われたものであった。NBはサンパウロ州内のItapecerica da Serraという街で生育しているが、この街には西日本出身者が特に多かったようで、NB自身が自然談話中で次のように語っている¹³。

(28) NB: こちらのItapecerica《地名: イタペセリカ》のほうでは、高知県が多かったんだよね。(NA: あー、あっちのねー。はいはい) んー、高知県と熊本県と (NA: んー) まあ、福島県はうちだけだったんだよね。

このような社会的背景が、NBが比較的多くのトルを用いたり、他の話者が使用していないヨルを使用したりすることの要因のひとつなのではないかと考えられる。

4.4 分析のまとめ

ここまで、形式ごとに使用の傾向を分析したが、それぞれの形式の使い分けに関わる言語内的な条件は以下のようにまとめられる。

(a) 否定形式

一段動詞では基本的にナイのみが用いられる。五段動詞の場合には特に制約なく、ナイとンの両形式が使用される。

(b) 存在動詞

¹² ICの出稼ぎ先が日本のどの地方であったかについては、調査時には時間の都合で聞くことができなかった。その後も県人会を再訪する機会があったが、IC氏の体調の都合で聞き取りは叶わないままである。

¹³ 逆に、NC・NDの生育したMogi das Cruzesは相対的に福島県出身者が多かったようである(コクエラ中央日本人会1973参照)。

丁寧体の場合、および否定の形をとる場合には基本的にイルが用いられる。非丁寧体かつ肯定の場合にはオルが使用されやすい。

(c) アスペクト形式

丁寧体の場合、および否定の形をとる場合には基本的にテルのみが用いられる。

非丁寧体かつ肯定の場合には特に制約なく、テルとトルの両形式が使用される。

また、言語外的な条件として、否定形式では五段動詞の場合、存在動詞とアスペクト形式では非丁寧体かつ肯定の場合を対象に話者別の使用状況をまとめたが、それについてもここで整理をし直す。表 14 は、ナイ/ン、イル/オル、テル/トルのどちらの形式がより数多く使われたかを、話者ごとにまとめたものである。その形式が $p < 0.05$ の水準で有意に数多く使われた場合¹⁴はカッコに入れずに、統計的に有意ではないものの 1 例でも多く使われた場合にはカッコに入れて、より数多く使われたほうの形式を示した。両形式が同数使われている場合には「-」で示している。また、西日本方言形はゴシック体の太字で示した。

表 14 話者ごとの各形式の使用状況

	存在動詞 (非丁寧体・肯定)	否定形式 (五段動詞)	アスペクト形式 (非丁寧体・肯定)
IA	オル	ン	トル
IC	(オル)	-	テル
ID	-	(ナイ)	テル
NA	(オル)	(ン)	テル
NB	オル	ナイ	(テル)
NC	(オル)	(ナイ)	テル
ND	イル	(ナイ)	テル

4.3 節で述べたとおり、同じ 1 世でも、コロニアと呼ばれる農村型の日系社会で長く暮らした IA は西日本方言形を多く使っているが、日本への出稼ぎ経験の長い IC やブラジル人とのつきあいの多い ID は東日本方言形が相対的に多く使われている。また、4.1 節で述べたとおり、日本語学校で標準的な日本語に接する機会の多かったと思われる 2 世も東日本方言形 (=標準語形) の使用が多い傾向にある。特に、NC・ND は、表 7 で示したとおり両親ともに福島県出身であり、日系企業での勤務経験も長いことから、東日本方言形 (=標準語形) の使用が多いものと思われる。

¹⁴ つまり、仮に両形式が同じ割合で使われると仮定した場合、偶然そのような使用の偏りが生じる確率が 5%未満の低い確率であるという場合。

5. 他の方言接触事例との比較：ポリビア沖縄系社会

ここまでブラジルの福島県出身者を例に分析をおこなったが、本節では、南米移民社会における他の方言接触の事例として、筆者を中心に記述をおこなったポリビア沖縄系社会の日本語の事例（白岩ほか 2010）を取り上げ、対照することにする。

表 15 として示すのは、南米ポリビアの沖縄県出身者によるコミュニティ「オキナワ村」で収集した自然談話資料をもとに、談話中で使われている否定形式の使用数をまとめたものである。

表 15 ポリビア・オキナワ村調査におけるナイ・ンの使用数
(白岩ほか 2010 より。カッコ内は異なり語数)

	五段動詞	非五段動詞	計
ナイ	43	53	96
ン	29	0	29

白岩ほか (2010) では異なり語数もカウントしているが、ここでは省く

この表からわかるとおり、ポリビアの沖縄県出身者は否定形式ンを五段動詞のみに使用し、非五段動詞では使用していない。これは本稿 4.1 節で示したブラジルの福島県出身者と同様の傾向である。

このほか、西日本出身者が一定数以上移住した日本の旧植民地である旧南洋群島（渋谷 1997）、台湾（簡 2003）、韓国（黄 2008）の日本語に関する記述でも、ンの使用が五段動詞にかぎられる傾向が見られる。本稿 4.1 節では、動詞末尾のルが撥音化する現象と関連させて、一段動詞でンが使用されない理由を説明したが、より一般的な傾向として、一段動詞でンが使われにくい理由が存在するのかもしれない。例えば、形態素分析をした場合、五段動詞の語幹に後接するンは-aN（例：kak-aN「書かん」）、一段動詞の語幹に後接するンは-N（例：mi-N「見ん」）と分析されるが、語形が特殊拍ひとつだけという不安定さのために一段動詞でンが使用されにくいのかかもしれない¹⁵。

また、存在動詞についていえば、白岩ほか (2010) で記述したポリビア沖縄系社会の事例では、存在動詞の使用例は全 25 例のすべてがイルであった。アスペクト形式もテルが 86 例なのに対し、トルが 5 例であり、圧倒的に標準語形のイル・テルの使用が多い¹⁶。表 15 に示したンの使用割合もブラジルの福島県出身者（4.1 節の表 8）と比べて相対的に低く、全体的に見て、ポリビア沖縄系社会の日本語は、ブラジルの福島県出身者の日本語よりも標準語的な性格が強いようである。

これは、白岩ほか (2010) で対象としたオキナワ村の場合、移民社会の構成員がほとんど沖縄県出身者で占められているためと考えられる。南米の日系社会で沖縄県出身者が本

¹⁵ 関西若年層方言においてンの使用頻度が一段動詞で極端に低いこと（ヘン・ナイの頻度が高い：高木 1999 参照）、西日本諸方言で一段動詞の否定形が五段化していること（例：見ン>見ラン、出ン>出ラン）なども、あるいは共通した理由によるものかもしれない。

¹⁶ このほか、ヨッタの形でヨルが 9 例見られているが、ポリビア沖縄系社会のヨッタはアスペクト形式というよりも目撃性の表示として使われている（白岩ほか 2010）

土出身者と別のコミュニティを作っていることは知られているが、このオキナワ村も、沖縄出身者とその子や孫によるコミュニティである。そのため、本土出身者どうしのコミュニティとくらべて、本土出身者（主に西日本出身者）の様々な方言と接する機会は相対的に少ない。また、沖縄のことば（ウチナーグチ）は本土の日本語と言語的に大きな隔たりがあるため、沖縄のことばの特徴が「日本語」にはあまり取り込まれなかったのではないかと考えられる。沖縄出身者の場合、「沖縄のことば＝ウチナーグチ」と標準的な「日本語」を別のコードとして意識する傾向があり、「日本語」で話す場合、その「日本語」に方言的な特徴を持ちこむことが少ないように思われる。

以上、簡単ではあるが、ポリビア沖縄系社会との対照をおこない、

- (a) 否定形式^ンの使用が五段動詞にかぎられる傾向がより一般的である可能性
- (b) 西日本出身者との接触が多く、言語的にも西日本方言と隔たりの少ない福島出身者にくらべ、沖縄出身者はより標準的な日本語を話していること

の2点を指摘した。

6. まとめ

本稿では、福島県出身の1世およびその子である2世を対象に、ブラジル日系社会において東日本出身者がどのように西日本方言を受け入れているか、方言接触の様相の一端を記述した。分析結果の概要は4.4節でまとめたとおりなので再び示すことはしないが、一見でたために方言が混じっているようでありつつ、実際には各方言形の使い分けに一定の基準（言語内的条件・言語外的条件）があることを示した。

本稿であつかったのはブラジル日系人の話す日本語のほんの一例にすぎず、出身や世代・年齢、職業、訪日経験の有無などによって、方言接触の様相は多種多様であることが予想される。5節で示したように、コミュニティの違いなどもふまえて、さらに分析を深める余地があるだろう。まだまだなすべき課題は多いが、ひとまず本稿では、現時点で収集・整備できた資料をもとに議論をおこなった。

参考文献

- 石川友紀 (1989) 「ブラジルにおける日本移民の地域的分布と職業構成の変遷 ——第二次世界大戦前を中心に——」『琉球大学法文学部紀要 史学・地理学篇』32
- 井脇千枝 (2005) 『ブラジル日系移民社会における方言接触』大阪大学大学院文学研究科修士学位論文
- 簡月真 (2003) 「台湾に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」簡月真・渋谷勝己編『環太平洋地域に残存する日本語の諸相 (2) -台湾-』大阪学院大学情報学部(科学研究費補助金「特定領域研究『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』)成果報告書
- 工藤真由美・森幸一・山東功・李吉鎔・中東靖恵 (2009) 『ブラジル日系・沖縄系移民社会における言語接触』ひつじ書房
- コクエラ中央日本人会 (1973) 『開拓のひびき栄えて コクエラ植民地五十年の歩み』コクエラ中央日本人会

- 国際協力事業団 (1994) 『海外移住統計』 国際協力事業団
- 国立国語研究所 (1967) 『日本言語地図 第2巻』 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1991) 『方言文法全国地図 第2集』 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1999) 『方言文法全国地図 第4集』 大蔵省印刷局
- 渋谷勝己 (1997) 「旧南洋群島に残存する日本語の動詞の文法カテゴリー」 『阪大日本語研究』 9
- 白岩広行・森田耕平・王子田笑子・工藤真由美 (2010) 「ボリビアのオキナワ移住地における言語接触」 『阪大日本語研究』 22
- 鈴木英夫 (1982) 「ブラジルにおける日本語の変容」 『名古屋大学教養部紀要 A (人文科学・社会科学)』 26
- 高木千恵 (1999) 「若年層の関西方言における否定辞ン・ヘンについて—談話から見た使用実態—」 『現代日本語研究』 6、大阪大学文学部日本語学講座
- 長尾勇 (1977) 「ブラジル日系人の日本語 —母国語の忘却と日本語の教育」 『言語生活』 308
- 永田高志 (1991a) 「ブラジル日系人の言語生活 —アサイ日系社会を例に—」 『移住研究』 28
- 永田高志 (1991b) 「ブラジル日系人の日本語の特徴 —戦前移住地アサイを例に」 『近畿大学文芸学部論集 文学・芸術・文化』 2-3
- 中東靖恵 (2006) 「ブラジル日系社会における言語の実態 —ブラジル日系人の日本語を中心に」 『国文学 解釈と鑑賞』 71-1
- 野元菊雄 (1969a) 「ブラジル便り」 『言語生活』 214
- 野元菊雄 (1969b) 「ブラジルの日本語」 『言語生活』 219
- 黄永熙 (2008) 「韓国高年層日本語の否定表現からみる第二言語の保持」 『阪大日本語研究』 20